

源 爲 憲

野へ毎に花をしつめばくさくのかうつる袖ぞ露けかりける
 此草のかうの歌ざまの左衛門すこしやのらぎいはせて
 侍るめりされどもかみの草のものと草にて下のかうの
 みそへたれば人に隠れん人の身のみかくれておもてあ
 らぬする心地をんしける

ちくさのかうつる袂も有けるをなせ朝顔を隠さざりけん

高砂の山のをじかひ年をへておきとをにこそ立あらしけれ

高砂の山のをじかひ年をへておきとをにこそ立あらしけれ

藤原もろふん

えら雲のかゝりしをかも秋霧のたてばや空に山の見ゆらん

此をにの歌のこれもおきとやうなれど秋霧の

たてばや空にやまのみゆらんといへるわたり河さりの

人に隠れん云々
 今もいふ諺に頭
 かくしてさいふ
 に似たり
 あらゆる類本
 にあらはならん
 さあり

類本に高砂の
 歌もろふんにて
 白雲の歌日向守
 の歌とせり

なかも類本をに
 もさあるよろし
 かるべし

河霧の云々清原
 深養父の歌にて

拾遺集秋にいれ
 り
 似たり其歌より
 に似て其歌より
 もおさりさまな
 るを云

そよよなる類本
 そよよふくさあ
 り

事類本程とあり

少しおされりハ
 すこしおされり
 の誤にあらじ

麓をこめて立ぬれば空にぞ秋の山のみえけるといへる

古ことを思ひあはすれば似かどりにあのみえける

麓とも巖ともみえず秋霧のたちあはかに空にみゆべき

すけのきみ

そよよなる秋の萩だにさかりせば何につけてか風を知らし

源すけあか

萩の葉のすゑこそ風の音よりぞ秋のふけゆく事いゑらるゝ

此萩の歌みづからも見給へ人してもよみあげさするに

萩の葉をそよがす風の音高みすゑこそ方少しまされり

撫子

山がつかさやの外に朝夕の露にうつるなをでしこのはさ

藤原たかたけ

秋ふかく色うつりゆく野へさから猶とさつにみゆる撫子

さなつかしき
は常になつかし
きの撫子の異名
の常夏を隠し
れたるなり

萱を類木
萱はさあり

類木にやはす
し類木萱にハ
あらで春の野に
云々さあり

露にうつるさ
いひて植し植は
の歌のたせたる
なまらせたる也
木枯の普木木枯
にさあり

此亦でしこの歌のいづれもくいとよくいのせて侍る
めりたし

秋も猶とこちつかしき野べあがら疑ひおける露ぞはかき
かる萱

ゆく秋の風に乱るゝかる萱のまめゆふ露もとまらざりけり
たのふ

植しうゑば束の間もさく萱をみちよの敷を敷ふばかり
此かるかやいたいのふがみ千代の敷あといへるわたり

秋の野の萱にやすすし春の野べにさきけん物の花
かんかもひいでられける

言の葉のこはく見ゆれどすまひ草露にの移る物にざりける
虫のね

あさぢふの露吹むすふ木枯のみだれてもさく虫のこゑか
但馬

橘 正 通

此虫のね以下押
順云々さいふ所
さて歌仙本錯乱
せり類従木に
りて改めたり

ふふわまに歌仙
木ふきぬるさあ
りこひ吹ぬるさ
過去に吹ぬるさ
なにか音せむに
あたりてまさり
さまにおほい
わさ田の稲も歌
仙木わさ田も歌
またさあり

あき風に露をかみだどさく虫のおもふ心をたれにとりまし
此虫のねの歌露吹結ふ木枯のあといへるわたりいひあ
れたりあどさだむるやどに正通が申すやう木枯とい冬
のわらしをこそいへ此頃の風をいひ雨をも時雨とや
いふべからんといふをきこしめして御籠の内みかごにこれか
れかゝる事をいふことをそなためしにひかめとて
木枯の秋のはつ風ふかぬまにあどか雲井に雁のおとせぬ
又

我門のわさ田の稲もからさくにまだきふきぬる木枯の風
あといへるの冬の嵐を秋のはつ風といへるにやあらん
其又たりをこそさだめ申されめとあるに付て又々見給
ふれば

奈良の都の古歌
ハ万葉集なり

清に無きをそへ
たり

菊の異名の翁草
に置くといふ事
ないひかけたり

あく虫の泪に赤せる露よりも露ふきむすぶ風のみまされり
そもく順梨壺に奈良の都のふる歌よみときえらび
奉りし時にいすこしくれ竹のよごもりて行末をたのみ
折も侍りき今にくさの庵に難波の浦のあしのけにのみ
わづらひてこもり侍ればすべてわれ船のひく人もあざ
さに捨られおかれたらん心地あんしけるかゝる内にも
此年頃ハ

えらけゆく髪に霜やおきな草言の葉も皆枯はてにけり
かく侍れば御歌ども定め申せるさまをいといひえら
ずことやうかり猶御前にて定めさせ給はんやよからん
と申すをきゝて正通が申すやう

霜がれの翁草といふのれども女郎花に赤るあびきけり
今日の判を見ればあせいひたふれてまかり出さんと

鳴台せたり類本
鳴あひむりさあ
りいつれにても
同し

このしや誤字な
るへし類本に
みこの宮のさあ
り

たまふへき一本
たふへきさあり
これに類本これ
かれさあり

する程にみ簾の内をきけば帥のすけ橘のあかきといひ
し人のむすめこれかれさぶらひて夜の更ゆくまゝにさ
やけさまさるべき琴のねを調べあはせたるにおまへの
庭の面をみれば月影のおぼろあるに花いろくにうち
みだれたり風の夜寒にありゆくに虫の聲々もあきあひ
せたりかゝる事どもを聞えのびすて、今のまかり出さ
んとて萩の下露に衣手ぬるゝもえらすおきゐて大みき
たぶあるときこしめしてにへ殿よりこのえや藏人所
の雑色藤原のたかたゞして御くだ物のおろし政所より
ハ長門の權守源の有忠の朝臣してさかあにたまふべき
ものをさまぐいろくに給へりこれに皆たまひあき
て申すやうまだあかぬもの御前の花の色々と虫の聲
にあんありけるあせ申してやうくまかりいでぬ爲憲

大井にての事也
り
まで天祿歌合な

さまくにより
つくせりまで類
本になし
しりて類本たり
てとある方まる
しかるへし
ちり類本綴衣そ
錦そとあり
み文字類本く文
字とあれと共
う文字の誤なる
べし

秋以下類本日か
す冬になりてひ
き奉る日とあり

ひとりあくるまでさぶらひて昨日より今日までのこと
をかきまゐるして奉りおく天祿といふ年はじまりて三と
せの秋のあかばある月のまもの十日に今二日おきて大
井にての事あり
一品宮とうちと御基あそびさるあふぎつく日あり宮ま
け給ひて七月七日にたてまつり給ふさまく〜にたへあ
ることをつくせりあやのもんに文字をもりてはれる歌
あまつ風あふぐともゆめちりたつあこの棚機のおれる衣ぞ
枇杷殿にてきくをもてあそびてさぐりてみ文字をえた
り
うつろいん時や見わかん冬の夜の霜とひとつにみゆる白菊
右馬頭遠度朝臣家にきたり宿りける頃もち月の御まひ
いぬる秋かすふゆきのぞみてひきつかふる日つかさの

水上月を類本に
断水上月とある
はよるしからず
すまん澄に住
なかれたり
岸のまに〜ひ
岸に似たかひて
なり此歌深くさ
浅きをしてまた
てたるなり

官人まゐりたるに御みきかを給ひての歌
君だにも荒たる宿にやせらすばよそにぞみましもち月の影
八月左大臣後院にて宴をさす夜の歌
水上月
水清みやどれる秋の月さへや千世まで君とすまんとすらん
岸のやとりのはあ
色深く岸のまに〜さける花あさき浪にのをられざりけり
くさむらの内の虫
草村のそこまで月の照らせばや鳴虫の音のかくれざるらん
あかのみかどの家にみあみに中務すむ六月梅のえだに
つきたるを折りてきたのいへにやる其ことばにいはいはく
こゝのいかくあんのこりたるとすあのちいふこゝろに
ん

泉にも云々類本
泉たに残らすい
のつて結句くひも
のつねにさあり

ぬせきをまき
なるをもるこ類
木にあり

音せハ類不音を
ハさあり

敷ならぬハ敷
意に敷ならぬ身
をそへたり
貞元ハ融天皇
の年號なり

竹川ハ伊勢多氣
郡にあり齋宮の
ある所也

ぬせぎにもさへらず水のもるに逢^あば前の梅づも残らざりけり

南のかへし

泉にも残らでいかでもりにけんせきの古杭くひもわかぬと

北かへし

いづみにもあらぬぬせぎの嶋近み波の越つゝをるとこそきけ

南かへし

打こゆる涙の音せばもらぬよりままきの風ぞ吹かへさまし

又其かへし

花をこそ人やをるどとがめしか敷ちらぬみの何にかいせん

貞元元年初齋宮の侍従のくりやにかはするあひだに入

月廿五日庚申の夜人々まるりあひてあそぶにいはいの

心を

神代より色もかへらぬ竹川のよゝをの君予かぞへわたらん

まくるハ月ハ明
日より十月に成
れハなり

永秋ハ融天皇
の年號なり

鏡山近江野洲郡
にあり

同年の九月はつる日齋宮野の宮に前栽うゑて又よむ

頼もしき野の宮人のうゝる花まぐるゝ月にあすのあるとも

此歌のかへし女房いひ出す

あすよりの時雨にかゝる花を植てのべやるべくも有ぬ秋哉

かへし

君が爲やち世の秋のあければやのべやるべくもあらずと云覽

永観元年一條藤大納言の家寢殿の障子に國々の名ある

所々を繪にかけるにかく歌

鏡山 夏

名にしおへば曇らざりけり鏡山うべこそ夏の影のみえけれ

大井川 秋

大井川そまに秋かせさむければたついは波も雪とこそみれ

天橋立

浪さへ類本名に
さへあり
八十島の攝津近
江出羽紀國等に
ありしと數の多
き嶋の意なれ
いつこにてしあ
るへし
浮嶋の伊勢駿河
陸奥等の國々に
ありこののわき
つたし
高砂山の惣名に
播州のふるへし
大淀の伊勢の名
所なり
まかすかの渡ハ
三河にあり
伊勢の云々の前
に類本初冬の庚
申の夜伊勢の齋
宮にさふらひて

みつゑるものばりかねてぞかへるらし波さへ高き天の橋立
やそ嶋
八十嶋を嶋毎にいかでみてしがな春のいたらぬ嶋の有やと
浮嶋
定めおき人の心にくらぶればたいうき嶋の名のみありけり
高砂
打よする波と尾上の松風とこゑたかさごやいづれあるらん
大淀
伊勢のあまに問ひきかねど大淀の濱のみるめりえるくぞ有ける
まかすかのわたり
行かよふ舟路のあれどまがすがの渡のあともおくぞ有ける
伊勢のいつきの宮秋野宮に渡りたまひて後冬の嵐寒く
ありてのはじめ廿日七日の夜庚申にあたり長々しき

松の聲夜の琴に
いるさいふ題に
て奉る歌の序さ
あり
廿日七日の廿七
日をまかかける
なり

調類本詩句さあ
り
泉はかりに順
の官和泉守なれ
の泉に洗む事に
かけて我身の官
の賤しきないへ
るなり
衣笠の岡山城に
あり

夜をつくとどやのあかすべきとかもほしてみ藤のう
ちにさふらふおもと人御階のもとに参れるまうち君た
ちに歌よませあそびせさせ給ふ歌の題にいなく松の聲
夜の琴に入るこれにつけてきけばあしびきの山おろし
にひいく松の深みどりもう玉の夜半にきこゆる琴の
おもしろさも皆ひとつにみだれあひゆきかよひてうべ
も昔の人風松に入るといふことの調をつくりおき傳へ
そめけんとかんおぼえける順が頭の髪夏も冬もわかぬ
雪かどあやまたれ心の關のからにもやまどにもすべて
つきさく御前の遣水に浮べるのこりの菊に思ひあはす
れば泉ばかりにまづめる身耻かしく名に高き衣笠の岡
に照るもみぢ葉を見渡せばかゝるまどぬにさぶらふ事
さへまばゆけれどさもあらばあれ人こそ聞てそしり笑

仰音にまたり
に我名の順を隠
なかしきりいさ
まさいふへし

天元四年融天皇
の年號なり

をしかの橋は京
より駿河に下る
道又の駿河にあ
る橋の名ふるへ
し
うらまで類本う
らみてあり
家の名のこも
類本家にあり

いめかけまくもかまこき御神のあはれども恵みさきは
ひ給ひてん今いにまへを見るが如くこよひの事を後の
人も見よとてかき記して奉るのわづらせごとくにまたがふ
あり

夜を寒みことにしもいる松風は君にひかれて千代や添らん
天元二年の秋おろかあるをのこさうし平の兼盛駿河
の守にてくだるにやる歌二首

時しもわれをじかのはしを秋行けば東をさへぞ懸渡るべき
思ひわびおのが船々ゆく小船田子の浦まできぬといひすぢ
まもつふさの守藤原のすゑたかが國にくだるに中納言
中宮の大夫の家のをのこども饒たまふ夜よめる
君のはや人あみくいにいでたちてまづみに沈む我に逢きよ

伊勢齋宮親王内 群行の後長奉送使ひるはたの中納言京

山田の原の伊勢
度會郡にあり

十月の政事略に
群忌集を引て
十月亥日食餅除
万病ともぬ源氏
餅まらせたり
餅の餅中にて
重に餅にひ俗
に支猪と稱す
あり親王攝家よ
り四位以上は黒
さ白さ五位は赤
さ白さ引合又奉
紅紙にて包み奉
さ入られたる
わつみの浮た
る山類本浮た
鳴さあり浮た
事也

にかへりたまふに齋王の御前にて饗まうけ祿給ふに男
女歌よむにたてまつる

神のます山田の原の鶴の子にかへるよりこそ千代の數へめ
天元二年十月はじめの亥の日右大臣の女御の火をけに
もちひくだものもりて内裏の女房どもにつかはすつ
でに大臣にも火をけひどつたてまつらせ給ふまろかね
してゐのこがめのかたを作りてすゑさせ給へるに
ゝれる歌

わたつみのうきたる山をおふよりの動きさき世を戴けや龜
天元二年正月一條藤大納言石山にまうで七日さぶら
ひ給ふ家人の詩作り歌よむあまた侍りいとまのひまに
からの歌つくりやまと歌よむおなにかたかさあつめたる
に侍従成信さなりありてつかうまつらす後に此歌をも

を見てみづから思ひつくりてこれにくいへよとすゝめ
 られたるかかに三川の權の守これまげの朝臣の江山此
 地深といふ詩に客帆有月風千里仙洞無人鶴一雙とつく
 れると内記爲憲の朝臣のまぎさの松といふことをよ
 める

老にけるまぎさの松のふか緑まづめる影をよそにやのみる
 といへるを

深緑松にもあらぬ朝あけのころもまへにぞまづみそめけん
 天元二年十月依宣旨たてまつる御屏風の歌子日の野べ
 に遊ぶ人

小松ひく人につれしふか緑木高きかげぞ千代のまされる
 桃の花ある家

あさ氷吹とく風のぬるけれといそぎてうめのはや咲にけり

いへるをの下類
 本二つを和す
 いへる歌あり
 こるもまへにそ
 類本衣さへなご
 さあり

人につれし類
 本人につれし類
 さあるはよろし
 からす

ぬるけれと類本
 寒けれとさあり

かりに假にの
 意に初梅香へ
 たり初梅香
 を来て折る香
 ふ少しい香
 は梅枝の誤に
 はあらじか
 くれとも乱れ共
 に糸の縁語なり

さらんかたなみ
 類本さらんかた
 なくさあり

手にさへ類本身
 にさへさあり
 なりついで折に
 居をかねたり
 紫の云々松の葉
 の見えぬほと藤
 のさきしまも
 もとの緑の松の
 根本の緑の色を
 いふ

春の野の霞める梅の花さけるに鷹をすゑて人ゆく

梅が香をかりにきてをる人やあると野べの霞の立隠すらん

人の家に櫻柳あり

鶯のわきてくれども青柳のいとやさくらに乱れわひにけり

花の木あまたある下に人々あそぶや水あり山ぶきの

花さけり

山吹の花の下水さかねどもみさくちさしとかげす見えける

河風のさらんかたがみ山吹のちりゆく水をせきやどめまし

松の木に藤かゝれり男をんさむらがれ居たりあるひに

をりてさる

住吉の岸の松さへかもゆれ手にさへかゝる藤あみのはさ

松風のおとに聞つる藤浪のをりつゝかへる名にこそ有けれ

むらさきの藤さく松の梢にのもとの緑も見えずありける

彦星の類本彦星をさあり

今日ハまかせし類本今日をまたましとあり

まれる類本まけるさあり
水の面にの歌殊にすくれてめてたき歌のさまなりかし
月あかみ類本月あかきとあれさよるしからす
まかたつ然立に鹿立を兼たり

七月七日をんき庭におりてたさばたまつる男きたりて
まがきのもとにたてり

彦星のまつとのかしにきにすどて天の河霧いそぎたつらん
棚機にけさのかしつるあさの糸をよるのまつると人のまらさや
天の河わたし守にもきりてしが棚機つめに今日のまかせし
名にしおへバかさゝぎの橋渡すきり別る、袖の猶やぬる覽
八月十五夜人の家にはちすあり木の葉浮ぶ月の影おち
たり男をんきこゝろくにあろぶすだれを隔て、物語
するもあり

はちす葉も紅葉もまれる水の面に底までみよと照す月かけ
水の面に照月あみをかぞふればこよひぞ秋の最中きりける
秋の夜月あかし林のもとに鹿たてり
月あかみ今宵ぞ敷いかぞへつる常もまかたつ木といみれども

三七九

あかす哉類本く
方まされり
あかき空一木あ
かき色とあり
をしてふ鳥の水
に浮ぶ錦を惜と
いふに驚きとい
ふ鳥をかけたり
仰うけたまはる
類本仰言のたま
ふるさありいつ
れにても宣旨を
取つく蔵人の意
なり
程もなきの泉の
水の程もなきの
きに和泉の國の
京より程なきを
そへいへりいつ
みはかりさいふ
事前に註したり
雲も類本ひまも
さあるよろし
たつは自身をた
さへいへるなり

秋の野にいろくの花紅葉ちりまがふ林のもとに遊ぶ
人あり鷹すゑたる人もあり

紅葉ゆる家も忘れてあかす哉かへらば色やうすくきるとて
時雨かど驚かれつゝふる紅葉あかき空をもくもるとぞみし
池水に紅葉ちりうかぶ水鳥あり馬にのれる人ゆきすぐ
空の霧の中に雁鳴て渡る野にかりする人あり
朝霧をわけゆく雁の何かれやかくれて後にまどふ今日かき
水の面にうかぶ紅葉の唐にしきをしてふ鳥ぞ立てゐるらし
此歌を奉らすついでに仰うけたまはる蔵人にやる

程もあき泉ばかりに沈む身いかかるつみの深きあるらん
天つ風空に吹あぐる雲もわらば澤にぞたづのさくとつげあん
天元三年の春能登守にきりてくだるに一條大納言の家
の人々餞する日の歌

銀多の山能登國
羽昨都にあり

進上深を一本に
はたてまつりあ
くるさよめり

越の海にむれゐるとも都鳥みやこのかた予戀しかるべき
かち時左衛門佐誠信儀する日の歌

神のますけたのみ山木まげくともわきて祈らん君が千年を
同じ頃

一昨年も去年も今年もをど、ひも昨日も今日も我こふる君
かき絶てどいぬのらくも思やえずかゝるに死なぬ身をいかにせん

五日菖蒲につけてある所に奉らせける
進上 こゝろさし

深 ふかき
右葉之菖蒲草 みきのあやめぐさ

千年五月五日可菊 ちとせのさつきいつるかるべき

順集終

三八〇
三八一

順集補遺

拾遺集

別かねもり駿河の守にて下り侍りけるうまのはあむけし
侍るとて

別路の渡せる橋もあきものをいかでかつねに戀わたるべき
二天曆御時歌合に

戀しきを何につけてか慰さめん夢だにみえずぬる夜きければ
女のもどよりくらきにかへりて遣ひしける

明ぐれの空にすわれのまをひぬる思ふ心のゆかぬまに
萬葉集和し侍りけるに

思ふらん心の内をまらぬ身のまぬばかりにもあらじと思ふ
三
ひとりのぬる宿にの月のみえざらば戀しき事の敷いまさらじ

四
泪川底のみくづとあはてゝ戀しきせにあがれこそすれ

戀しきを云々物
思にまざるむ夜
もなれば夢に
も君をみる事
なれば慰めん
事なれどなり
三句一本なく
まじりあり
あけくれの明方
に少くらく成
る時を云
思ふらん袋草子
に思ふさもこ
あり
獨る云々獨
て月を見てま
く戀のまさる
心なり
泪川云々涙に沈
みぬて戀しき思
ふ心に身も流る
いはかりなるな
かくよめるなり

齋の宮に五木を
そへいへり

つひの一本露の
さあり

雜春 齋院子日

一本の松のちとせもひさしきにいつきの宮を思ひやらるゝ
哀傷世のばかあき事をいひてよみ侍りける

草枕人のたれとかいひおきしつひのすみかゝ野山とぞみる

玉葉集

戀一戀の歌とて

つらくとも忘れず戀ん鹿嶋かしまあるあふくま川の逢瀬あふせありやと
いさや又戀にまぬてふも事おし我をや後のためしにせむ

鹿嶋なる會限川
秋の寐覺に常陸
さあれさ會限川
い常陸に鹿嶋と
れれ陸奥の方
然るへし鹿嶋と
いふ地名常陸に
名高けれ又國
々奥にもあるふ
るべし

順集補遺終

佐々木弘綱
佐々木信綱
標註

天德歌合

東京 博文館藏版

童は御前に伺候
つして種々の用を
つむる者にて

童

源	藤	平	藤	藤	藤	源	平	藤	源	藤	源
時	重	珍	濟	守	爲	伊	時	忠	保	伊	延
仲	輔	材	時	仁	光	陟	經	君	光	尹	光

藤	藤	藤	秦	藤	大	藤	藤	藤	藤	清	藤
爲	雅	永	清	安	江	清	助	兼	國	原	文
光	材	保	主	親	齋	遠	信	家	光	元	範

歌合の當日は
湖の持はこひな
をなせはひな
し左右にわけられ
しなり

平	源	藤	藤	藤	藤	藤	藤
保	時	道	爲	景	惟	信	藤
遠	明	隆	時	舒	賢	頼	藤

左

藤	眞	藤	藤	義	能	延	藤
元	朝	保	朝	保	能	延	藤
明	正	光	朝	理	正	正	藤

右

[Empty space for the main text on the right page]

倉橋山の大和十
市郡倉橋村にあ
りかひの峽さか
きて山と山との
間を云

者へてへりさよ
むべしさいの反
てにてさいへり
の約なり

歌のふるまひハ
歌のさまをいへ
るなるへし

一番霞

左勝

朝

忠

右

兼

盛

くらはしの山のかひより春霞としをつみてや立わたるらん
ふるさとの春めきにけりみ吉野のみかきが原を霞こめたり
左右歌讀合 勅小臣曰可定 奏勝劣者遂巡 奏云小
臣纒雖備三十一之字全難辨勝劣之義伏請 天裁 勅
云若不定勝劣已失今日興兼結後代辭歟猶速可定申者
遇 天氣之不許表空慮之拙而已
左歌くらはし山に年をつむといへる事よろし又橋に
わたるさどいふもさもありせん歌のふるまひもさて
ありせん右歌さどかふるさどにしも春めかしけん霞
こめたらんもおそろしげにや此間只在 勅定小臣展

左右の仰ハさ
くの勅旨ないふ

氷に立云々禮記
月令立春の候に
東風解氷吹へ
て谷の氷もさけ
る心なり春風吹
ひきたるに猶さ
のさかぬをよめ
るなりハまたら
はたらハまたら
に同じ

候、天氣、透無左右、仰因以左爲勝

左勝

順

こほりだにとまらぬはるの谷風にまだうちとけぬ鶯のこゑ

右

兼

盛

わがやどに鶯いたくさくさるは庭もはだらに花やちるらん
左歌心ばへいとをかし右哥よしあき花ちらすもこと
ある興さく詞もよろしからず以左爲勝

三番

左勝

朝

忠

我宿の梅が枝に鳴うぐひすの風のたよりに香をやとめこし
佐保姫のいとそめかくる青柳をふきさみだりそ春のやま風

右

兼

盛

糸染かくるハ女
子のまわさなれ
ハ柳の糸を佐保

姫のわきにいひ
なす所歌のたも
ふきなり
保姫の歌々の佐
を山すへきに歌
やまりて柳の歌
なよみたりさ也

鶯をいだすべきに柳をよみてまし

白妙の雪ふりやまぬうめが枝に今ぞうぐひす春とさくさる

たがへてよみたれと本歌をめしいだして講せらる

右講師博雅朝臣誤讀柳歌左方論云須讀申鶯歌而誤讀
申柳歌於今者不可讀申歟者以左方論申旨 奏聞 仰
云可據定申者小臣 奏云左方之所申非無謂如此之事
只隨時之議但依人之誤何留其歌仍令讀申其時博雅朝
臣頗變色速不讀之縱雖讀揚其音振被爲左人咲又歌の
詞に鶯春とさくことそらごとかり仍透爲負

四番 柳

左

望

城

あられたまの年をへつゝも青柳の糸いづれの春かたゆべき

右勝

兼

盛

あられたまの云々
糸いたねじさ也
糸をへる事をそ
へいへり

佐保姫のいとそめかくる青柳をふきかみだりそ春の山かせ
 欲^{スル}讀^ム右^ノ哥^ノ之^ヲ問^フ左^ニ方^ニ人^ニ申^テ云^フ件^ノ柳^ノ歌^ハ違^フ濫^シ次^ニ第^ニ讀^ム事^ハ先^ニ畢^ス而^{シテ}
 重^テ欲^ム讀^ム之^ヲ似^シ忘^ル首^ノ尾^ノ者^ヲ小^ノ臣^ノ答^テ云^フ鶯^ノ歌^ハ之^ノ時^ニ隨^テ左^ニ申^テ己^ノ有^リ裁^ス
 許^テ重^テ不^レ可^ク申^テ左^ニ歌^ハあ^らた^まの^とし^をへ^んあ^をや^ぎよ^し
 ち^し右^ニ歌^ハさ^せる^こと^のち^けれ^ど難^ハ見^エず^{仍^ニ以^テ右^ニ爲^ス}
 勝

五番 櫻

左 勝

朝

忠

たにハナリとも
 せめてさいふ
 なり
 世に共に云々世
 ハ久しき物なれ
 ハ世に共に久し
 くちらぬやうに
 となり

あだちりと常はまりにき櫻花惜むるどだにのどけからちん
 右 元 輔
 よど共にちらすもあらん櫻花あかぬ心いつかたゆべき
 左歌さてもありちんさせる難いあし言葉いどよか
 らねどもくせあききこゆ右哥のするあはぬこちぞ

足引の云々たま
 にく此山かくれ
 なる風の知らば散
 すへきにまらす
 なさなりやさし
 き心はへなり女
 の歌なればなり
 去かればゆる也
 今俗にもうハ
 さいふに同じ

する又歌がらもおとれり以左爲勝

六番

左 持

能

宣

櫻花風にしちらぬものあらばおもふ事あき春にすあらし
 右 兼 盛

櫻花色見るほせによをしへば年のゆくをもえらでやみちん
 左右ともによくつかまつれり仍爲持

七番

左 勝

少

貳

命

婦

あしひきの山がくれある櫻花ちりのこれりと風にえらすち
 右 中 務
 年毎に来つゝわが見るさくら花霞もいまいたちちかくしそ
 左歌いとをかしくてさてもありちん右歌いづこに

荒涼の俗に取ま
まりのないさい
ふ意なり

山吹を歎冬さか
くはわろきよし
前にいへり

春深み云々井手
ハ山城の名所に
てのさまより花
の有様思ひやり
して此歌を見るへ

右歌云々を八雲
御抄にさもさか
ほゆる難也さみ
也

仍以左爲勝類本
されハ左ウチウ
もあり

きつゝ見るぞ頗荒涼也いまのといふこといよしきき
ことあり仍以左爲勝

八番 歎冬

左 勝

順

春ふかみ井手の川浪たち歸り見てこそゆかめやまぶきの花

右

兼

盛

一重づゝ八重山ぶきのひらけか程へて句ふ花とたのまん

左歌いとをかしさることありときこゆ右歌八重やま
ぶきのひとへづゝひらけんのひとへあるやまぶきに
てこそあらめ心のあるに似たれども八重さかすは本
意なくやあらん又上の句のはて下の句のはてとお奇
じ文字あり仍以左爲勝

九番 藤

左

朝

忠

ひらさきに句ふ藤さみ打はへて松にぞ千代の色のかゝれる

右 勝

兼

盛

われゆきていろ見るばかり住吉の岸の藤波をりなつくしそ

水なくて藤浪云
々の事八雲御抄
にさししなき難
也さみ也

よすへかりける
ハ浪の縁の詞を
いる方よろし
さなり
かくそ古きにも
あるハカヤウに
古き歌にもしよ
ありさなり

然申類本愁申さ
あるハよろしか
らす

左歌水かくて藤波といふこといふるき歌にをりく
ありされども尋ぬる人あければといまれるあるべし
歌合にいかいあらんことによせぬはあるまじいは
れかし猶水池岸ささぞよすべかりける歌がらひきよ
げあり右歌おちじ浪あるに岸によせられたよりあ
りかくぞふるきにもあるふちさみとおしあべていふ
ことにいあらず 御氣色もさやうにぞ見ゆる小臣問
源大納言云尤艶也まばらく持に疑之間右方人申云左
歌の藤波水によらずいいかいと然申事理可然仍以右

爲勝
十番 暮春

左 勝

朝 忠

花だにもちらで別る、春あらばいとかく今日の惜まざらまし

博 古

行春のとまりをしふる物あらば我も舟出をかくれざらまし
右歌首尾相叶ひふるまひもありてをかし右歌詞だみ
たるやうあり歌がらもおどれり仍以左爲勝

十一番 首夏

左 持

能 宣

さく聲のまださかねども蟬の羽の薄き衣をたちぞきてける

右

中 務

夏衣たち出るけふの花さくらかたみの色もぬぎやかふらん

泊教ふる類本さ
まりしふるさ
あり
詞たみたる類本
あり
詞たみたるさ

なく聲の衣かへ
の歌にて夏の日
き装束の蟬の羽
衣さいへなく今日
ハ未其なく蟬の
羽開かれぬも蟬の
羽衣をたちきるた

十二番 卯花

左

忠 見

左の歌の夏の初とおぼゆれと右の歌のたち出る今日
のとわれバとしとぞおぼゆる又ぬぎかふともわれ
バ左の歌よりのとくぞ聞ゆるされど歌の品おあは
とされバ持にぞ定め申す

道とやみ人もかよはぬ奥山にさけるうの花たれか折らまし

右 勝

兼 盛

あらしのみ寒きみ山のうの花の消せぬ雪とあやまたれつゝ
左歌山の卯の花をしもおもひ出けんこそいか右歌
おあは山あれどをかしさまされり依以右爲勝

十三番 郭公

左 持

望 城

消せぬ雪とあ
りつれにてあ
消しつれにてあ
同しつれにてあ
ないかいかい
けなふきしな
へし

さよふけて時鳥を聞
て感し悦ひて今
夜れさめすは
その人傳にのみ
聞て我がえきく
ましかりてはな
意也人つてはな
つたへを約めた
る也

はのかにぞあきわたるある時鳥み山をいづる夜半のはつ聲
右 兼 盛
み山出て夜半にやきつる郭公あかつきかけて聲のさこゆる
左右ともに興ありていとをかし仍爲持

十四番

左 持

忠

見

さ夜ふけて寐さめざりせば郭公人づてにこそ聞べかりけれ
右 元 眞

人あらばまてといふべきを時鳥二聲どだにさかですぎぬる
左歌きかんとおもはでねさめしけんぞわやしきさ
れと哥がらをかして右歌人ありとも一聲きかんとて待
てといいかいはいはんとするまばしまてあといふべき
心かことたらぬ心地とするいづれもおあじやどの歌

か
る
人
な
し
に
い
は
れ
る
人
な
し
に
い
は
れ
る
人
な
し
に
い
は
れ
る
人
な
し
に
い
は
れ

十五番 夏草

左 勝

忠

見

あれば持にぞ定め申す

夏草の中を露けみかきわけてかる人あしにまげる野邊かあ
右 兼 盛

夏ふかくかりずまにける大あらしきの森の下草あべて人かる
右歌あべて人かるあせわろし左におどりたり仍以左
爲勝

十六番 戀

左 勝

朝

忠

人傳にまらせてしがあ隠れぬのみこもりにもみ戀や渡らん
右 中 務
む玉のよるの夢だにまさしく我思ふ事を人に見せばや

夏深く云々古今
集に大荒木の森
の下の草老ぬれ
駒もすさめすか
る人もなひさあ
るにさかひな夏
ての人のかへな
よめるなるへし
大荒木杜ハ山城
なり
かくれぬハ隠沼
なり

いかてかひいかにして勝へきそと仰せらるゝ也

十七番

左 勝

能 宣

左歌いとをかしつよきことあれとさてもありあん右歌むバたまどかけり夜といふ事ぬバたまどすいふかし歌いあぢやうあれどかさあやまちたるあめれバそのよし 奏すればあやまちあらんにいいかでかどおろせどあれバ以左爲勝

戀しきを何につけてか慰さめん夢だに見えずぬる夜あければ

右

中 務

君こふる心の空にあまのはらかひあくてふる月日ありけり

左歌頗有情仍爲勝

十八番

左 持

本院侍従

君こふる類本君こふさ又四句一本かひなくてのくさあり

人まれす云々拾遺集にハよそなから逢見ぬ程にさ有てよみ人まらすさあり
こさならはハこの意なり

にくさげにその下侍るの文字をばふきし也

逢事の云々たまらみよめるなり

ふる物を一本程ふるなきあり

人まれすあふを待まに戀まあバ何にかへたる命どかいほむ

右

中 務

ことさらバ雲井の月とかりあゝん戀しき影や空に見ゆると左歌さてもありあん右歌の上下の句のうへにおあじ文字どあめるにくさげにぞいかいさぶらふべきと奏すれば左右の仰あし左の人申す左のさる文字さぶらはずと申すめれとさせる難にのあらぬにぞ仍爲持

十九番

左 勝

朝 忠

逢ことのたえてしかくバ中々に人をも身をも恨みざらまし

右

元 眞

君こふどかつの消つゝふる物をかくてもいける身とや見る處左右歌いとをかしされと左の歌の詞きよげありとて

柳重ハ表白裏背
なり
同じ方ハ右方也

宣旨通鑑綱目註
云天子命謂宣旨
又曰宣命

たり。だいに柳の枝をつくれり。淺花田の打敷玄たり。うちる
四人青色に柳重にて、北の方よりかきたつ。同じ方の殿上人そ
ひて出したつ。數さしの洲濱の北の際にかく。數さしいうへの
童。左の歌たそがれ時に奉る。其洲濱の沈の山鏡を水にして洲
にも銀の鶴二つたて、金の山吹に銀の葉に歌の書て、鶴にく
はせたり。花足の紫檀を作りて、銀のすぢやりて、下机のすやう
にして、かねのすぢやれり。あしゆひのくみ、獲のふちの末濃、芦
手をぬひ物に玄たり。獲のだいに玄るがねの竹のかたに作り
て、うちしきにいえびぞめ、うちる六人、赤色に櫻重着て南の方
より御前にかきたつ。數さしの洲濱南の際にかく。宣旨に左大
臣、大納言、源朝臣、右の大將、藤原の朝臣、雅信の朝臣、まさひらの
朝臣参れり。御前にあたれる渡殿に、わわかれてさぶらふ。左右
の方の殿上人、後涼殿のかたにさぶらふ。おのします問の御簾

凡類雜要云
帷野平織以
白泥白草等
畫之次傍胡
粉用之凡裏
張也紐冬打
色打夏生緋
五尺三寸四
長六尺幅別
細付之巾

箏和名抄云俗
象之古止似瑟
而規有十三絃
瑶瑟同書云本
於胡也馬三絃
一云武造也今
所用是也
和琴同書云琴
體抄云我朝本
有之古無抄也
又長明無名抄

のわけたり。わけぬ間御几帳たて渡して、女房さぶらふ。かゝる
程に日暮ぬ。北南の庭にいかゝりともす。仰言にて左右の歌よ
むべき人をめす。左延光の朝臣、右博雅の朝臣、洲濱のもとによ
りて、歌とりて讀む。おやせごにて左大臣して、歌の勝負のわ
させさせたまふ。かすおやく、左まさるまゝに、くにてりの朝臣
いはんかたあしとおもへり。又左のおとを恨めしと見やる。
歌ども見はて、樂所のをのこどもをめす。左右とりわかれて
おのゝ庭にさぶらふ。左のどうのからい、おこらかしと思ひ
てさうの笛ふく。左の大臣箏の琴ひく。圖書の頭をさむ琵琶。大
せんのおんがき琴。伊豫の様もりとき和琴。左衛門志富門笛。
修理の大夫まげのぶの朝臣、左京權太夫さねとし、どのもりの
頭橋のよりたいあを、歌うたひにさぶらふ。右に源大納言
琵琶。右近中將ひろまさの朝臣和琴。雅樂頭まげびらの朝臣箏。

いにしへ弓六張
なならへてひけ
るより起る由な
いへり
あな尊は龍馬
樂の呂の歌にあ
な尊は今日の厚
ささいにしへも
かくや有けん今
日の尊ささあ
るをいへり
櫻人青垣山城の
こまのわたりい
つれも龍馬樂の
呂歌なり

細長は幼き上藤
の上にはる物に
て皇太子も幼少
の時召せらるい
事女官飾抄にあ
り

の琴のりたいの朝臣さうのふえ。右近少將きよとほたかみつ
さんまさの歌うたふ。かち方雙調をふきて、あきたふとうたふ。
次に右さくら人うたふ。左うたへば右のやみぬ。かたみにぞわ
そぶ。左あしがさうたふ。右やましるのこまのわたりうたふ。心
あるべし。かくあそぶ程に夜わけぬ。わけばのにきみるたるに、
あがきがあさがほを、左大臣みか人の笑ふを、きゝもいれで琴
ひきぬたる顔、いとわりあし。右のひとかはらけとらすとてめ
すに、くにてりの朝臣あつきあんとてかくれぬ。左のうたよひ
人に、どうの更衣女装束一くだりとらす。又上達部にうへよ
り給ふ。左大臣に夏の装束一くだり、大納言に白きあやの
細長一重宰相にひとへがさねの細長、殿上樂所の人々に
こしざし、左に春の鶯の囀といふあそび、くれぬる春を惜む
により、右に柳の花のうらみといふ樂を奏す。かすのつもるを

以上左方の日
記にて以下右
方の日記なるべ
し
うへは村上天皇
を云

おもふあるべし

三月二日、左右方人のかきわけを内侍のすけして、かたくの
頭のさうしに給へり。これ二月廿九日に、うへのみづから書出
させ給へるあり。三日の日題を給ふ。これの内侍のすけの御前
にてかき出せるあり。

- かすみ一 うぐひす二 柳一
- さくら三 やまぶき一 ふぢ一
- 春の暮一 初の夏一 時鳥二
- うの花一 あつ草一 戀五

かくて三十日の日のひつじの時、清凉殿の西面のみす一間あ
けさせ給ひて、後涼殿のわた殿にあたりて、西むきに倚子の御
座よそひておはします。わた殿をわけて、南のつばに前栽植さ

つほは小庭前栽
は植込云

かたはまほの
反對にまほの
ては見さまの
しきないへり

せ給ひて、南にの左藤の花、北にの右山吹の花うゑさせ給へり。
かたくの藏人命婦の、おましの北南に、みすの内、に左右とさ
ぶらふ。装束のれいの赤く青し。かく皆どのひて、まづ右の洲
濱奉るとて、童打敷とりて、御前にまきていりぬ。又童四人洲濱
かきて参る。装束のあを色に柳がさね、たけのやを髪、の長さよ
くと、のひてかたやあらず。洲濱の覆、あをき末濃にてぬひも
のまたり。打敷の淺黄花田、洲濱のさまの、うへのに、沈にこが
ねのすぢやれり。下のに、淺香にまろがねのすぢやれり。歌の
まろがねこがねをつくり花にして、歌にまろがひつゝ、枝につ
けたり。戀の歌の鶉舟にして、かゝり火にいれたり。花の歌の舟
につみたり。うぐひすの、驚くひたり。さまづにつけてまろ
り。日のうち傾きて物の色みゆるやどにて、いとめでたし。かゝ
るほどに、左いとおそくまるとて、主殿頭平のこれつねをめ

かへりては童打
敷をしきて立
へりてなり

かたはまほの
見苦しきを云
つほせさいは
前裁なり
なかくしく
はかりさなき
ふ意なり
大燈油をつ
いへるにて
事也

して、おそしとめさせ給ふ。猶遅ければ、藏人平のよしきをめし
て、せめさせ給ふ。たゞいままゐらすと奏す。かゝるやどにいと
いたらくれぬ。又藏人藤原まげすけをめして、おそき由仰せ給
ふ。物のさまも見えぬ程に、洲濱奉る。童うちしきとりてまゐる。
かへりて又四人洲濱かきてまゐる。装束あかいろに櫻がさね
あるべし。されど見えねばかひなし。數さしのすはま、又童もた
り。すべて六人わらはあり。おほきさ、どのやらずとらふ。よしき
童の中にまじりてさわぐ。大きにてかたはにもあらじとおも
ひたるあるべし。右の數さしの洲濱の、方の殿上童とりて、つば
せざいにたてゝさぶらふ。左の洲濱をさくしく見えす。くら
くてすあはちおほとあぶらまゐる。左源少將とれり。打敷の左
兵衛佐とれり。右藏人少將おやとあぶらとれり。うちしきの後
少將とれり。渡殿の左右にうたの上達部つけり。左おと、實頼

つきなみは若也
ひなり

右大將師尹藤宰相朝成源大納言高明源宰相雅信うへ人の後涼殿のすのこに、北南つきをみるたり。かたくの男女房にあらじまたり。かくて左の講師右兵衛の督源延光よりて、洲濱の覆をすこし引あけて、山吹の花の枝の一尺ばかりある、こがねしてつくれるをとりて、さいけてよひとよむたり。花びらに歌のかきたるあるべし。どもかくもせでさへげてよみときむたり。かうろさへげたるに似たり。右の講師源中將博雅、洲濱の覆の藏人少將すけのふもたり。後少將たかみつよりてとる。かくて歌ども合するに、いかいありけん、右負にけり。合せはて、御あそびつかうまつる。めし人の左右の壺前裁にさぶらふ。左の左おと、筆の琴。勘解由長官笙のふえ。圖書頭をさむ琵琶。大膳進ちがき琴。伊豫様もりとさ、和琴。左衛門志富門笛。修理大夫まげのふ朝臣、右京大夫さねとし、主殿頭これつね、橋のよりた

はいか々ありけん
は右方にてけけん
るなるへけけん
我方たるはすけけん
にいたるはづけけん
へるなり
かこい

地下は未昇殿を
許されざる人を
いふ

あどの歌うたひにぞさぶらふ。右の源大納言琵琶。右近中將ひろまさの朝臣和琴。雅樂頭まげひら筆の琴。權左中辨よりたの朝臣笙の笛。治部卿大藏卿もりあきらの朝臣、右近衛少將きよとほ、たかみつ、備前様きんまさあどの、歌うたひにさぶらふ。これが中に、左のうたひぶし、右京大夫さねとし、地下の人に、て、其の座にさぶらふ。右のうたひだし、治部卿渡殿にさぶらふ。皆笏拍子とれり。まづかちかた雙調ふきて、あきたふどあそぶ。次に右おちと調子ふきて、さくら人あそぶ。次々これよりはじめて、たがひに左右ひまかくあそびあかし給ふ。つとめてうへよりかづけものたまふ。左のおどいに、御ぞ一くだり。源大納言に、白きうちき一かさね。宰相たちひとへの細長を給ふ。こと人々に、皆腰ざしをたまふ。二日といふ日ささいの宮に、洲濱をも御らんせさせに奉れ給ふ。かきてまゐる人々藏

あそひあかし
管絃の遊をなし
夜を明し給ふ也

奉れば奉らせを
つめたる也

人ためみつまさき、二人まゐる。御覽じてかづけ物給ふ。さて右の洲濱のどいめさせ給ひて、左のなかへしまゐらせ給へり。洲濱の有様、うへへえろかねのすぢやれり。下にすはうに白らふのすぢやれりけり。覆すはうの末濃、打敷のこきゑびぞめの黄かりけり。これの若宮に奉らせ給ひてけり。かくてあはする日、三月のつごもりの日あれば、すはまどりいづる日、四月朔日、つごめてにありて、左の夏のかざみにいでたり。右のおちと冬のながらにてどりいる。その左の洲濱の覆に、芦手を縫物にしたる歌。

つごめては早朝
を云
かさみは汗衫と
かさきても汗取
の服なりしを後
に女童の上着の
上に着るものと
なれり
冬のなからば冬
のまゝの装束な
いふ

千代にちよ加へたりともみゆる哉松のかけある鶴の齡の
たち歸りおけや驚あすよりのやとゝぎすてふ聲ぞ聞えむ
君か代り天の羽衣まれにきておづともつきぬ巖からかん
藤の花色ふかけれや陰みれば池の水さへこむらさきある

名残をば夏にかけつゝ、百とせの春のみちとにさける藤浪

天徳四年三月卅日歌合左右假名日記

歌合の又のつごめて左かちぬとさゝて大貳好古の宰相右兵衛督朝臣におこせたり

白浪の立よるかたのかた人のかつによりてや心ゆくらむかへし朝忠宰相

もろ共に心をよする白浪のそこのかひある心地こそすれこれを見て内侍のすけ

ときにも立まさりにし白浪の君が方よりかひとこそみれ歌合明日とて宰相の更衣につかはす

上

言の葉をくらふの山のおぼつかさ深き心のいづれ勝れる御かへし

うへは天皇を云
暗部山城組伊
部にありこは
歌の勝劣をくら
ふる事にけさ
せ給へる也

かひある心
あるに心をそへ
たり

心は存分に
思ふにいふ

道は山の道に歌
の道なかれたり

よるへ定めぬは
風の吹窩に浪の
より所の定まら
ぬを云

道玄れるくらぶの山にあらぬ身の深さをよそにさく斗也
又弁の更衣につかはす
吹風によるべさだめぬ白浪のいづれのかたに心よせまし
御かへし
定めさき心ありとも白浪のよりていかくあるとこそみめ

内裏歌合 終

明治廿三年十二月八日印刷
明治廿三年十二月九日出版

正價金廿五錢

編輯兼
發行者

大橋新太郎
東京日本橋區本町一丁目十二番地

印刷者

宮本敦
東京日本橋區銀座三丁目十二番地



發行所 博文館

東京日本橋區本町三丁目十六番地

日本歌學全書發兌規定

日本歌學全書

全部拾貳卷
紙數五千頁

(一冊紙數四
百廿頁以上)

明治廿三年十月ヨリ毎月一冊發兌一ケ年間ニテ全部完成ス

正價

一冊金廿五錢 三冊前金七拾二錢 六冊前金壹圓卅五錢 十二冊前金貳圓五拾錢
●郵便稅一冊三錢宛 ●御注文ハ一切前金ヲ要ス ●郵便切手代用一割増 ●全部前金御注文ノ諸君ヘハ館友証ヲ呈ス

本書ハ每編讀切ナルヲ以テ分冊合本等ノ手數ナシ且ツ每編貴顯大家ノ題序ヲ附ス

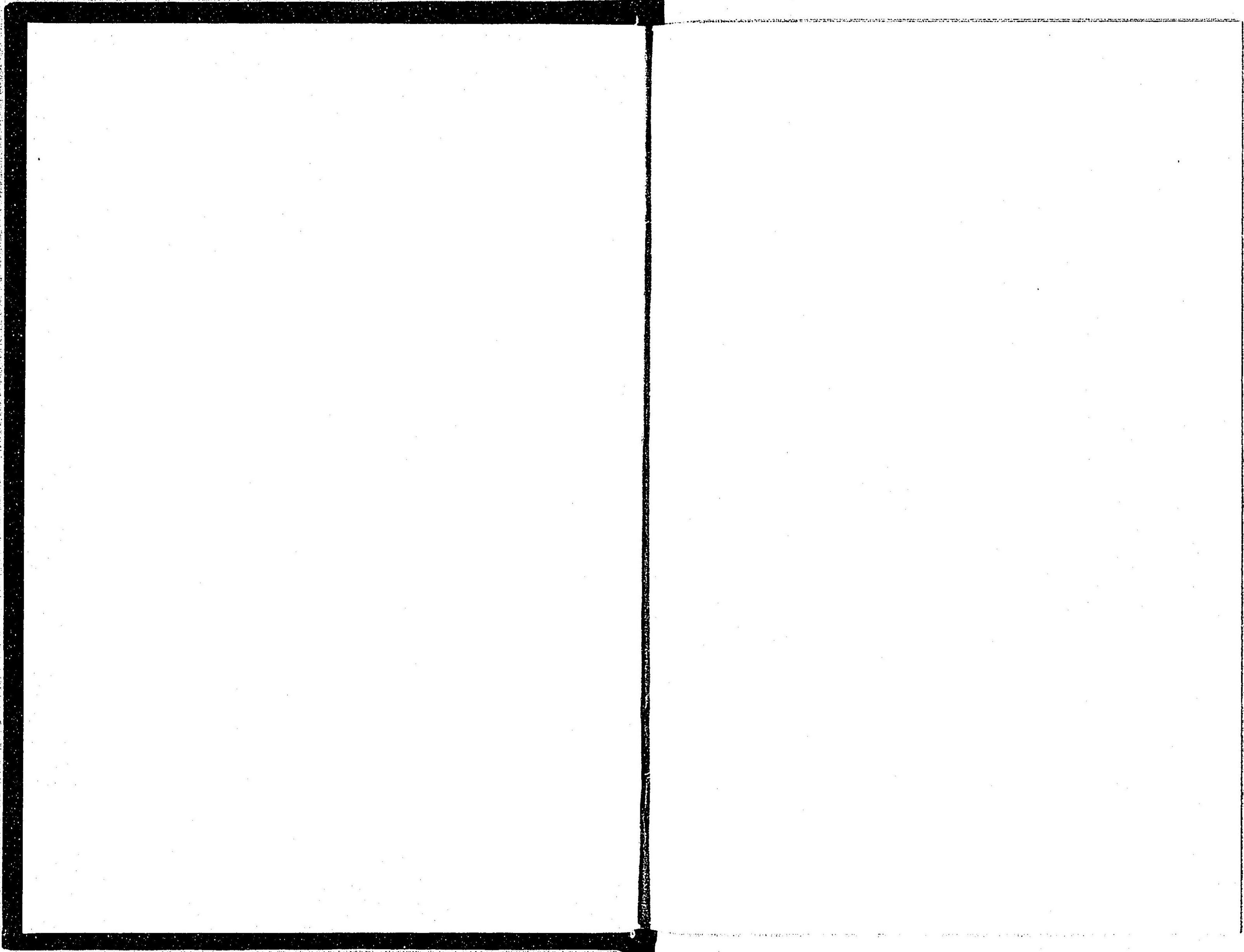
總目次

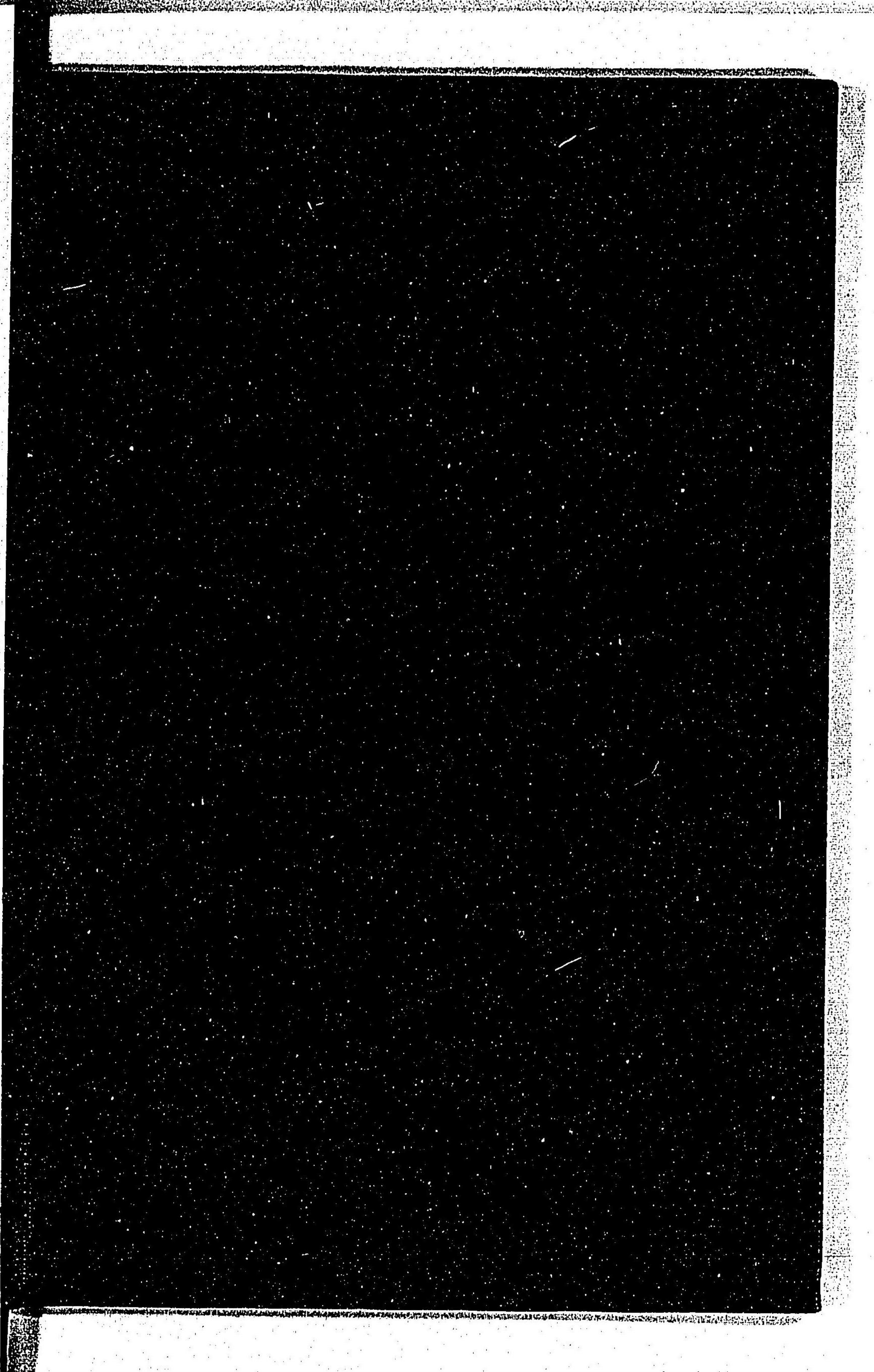
- 第一編 古今集 貫之家集 躬恒家集 友則家集 忠岑家集
- 第二編 後撰集 元輔家集 能宣家集 順家集 天徳歌合
- 第三編 拾遺集 公任家集 紫式部家集 清少納言家集
- 第四編 後拾遺集 高陽院歌合 堀川百集 永久百首
- 第五編 金葉集 詞華集 堀川百集 後京極攝政自歌合
- 第六編 千載集 俊成卿家集 實朝家集 後徳大寺大臣家集
- 第七編 新古今集 百人一首
- 第八編 西行家集 賴政家集 萬葉集
- 第九編 以下第十二編迄

以上各書目ノ外紙數ノ都合ニ依リ尙ホ書目ヲ増加スルコトアルベシ

工 B68







911.108

N6852

S

